

法は非侵襲的かつ容易，しかも定量的に門脈―肺循環異常の検出に有用と考えられた。

21. Hepatic veno-occlusive disease の 1 例

及川 秀樹 寺菌 公雄 山本 理佳
丸岡 伸 中村 護 坂本 澄彦

(東北大・放)

骨髄移植後に生じた Hepatic Veno-occlusive Disease の一例を報告した。症例は 20 歳男性，malignant lymphoma (diffuse mixed type) の診断で化学療法施行されていたが，骨髄移植の適応と判断され平成 2 年 6 月 15 日，実兄を donor とする骨髄移植が施行された。移植後第 3 週頃より肝腫大の増強，黄疸，腹水，体重増加を認め，臨床症状より Hepatic-VOD と診断された。移植後約 2 か月後の ^{99m}Tc -スズコロイドを用いた肝シンチグラフィにて liver activity のほぼ均一かつ著明な低下を認め，21 日後には activity の著しい回復を認めた。liver activity 低下の原因として有効肝血流量の低下と，肝細胞壊死とともにクッパー細胞の障害が起こったものと推測された。単純 CT では肝左右両葉に及ぶまだら状の低吸収領域を認め，本疾患において組織学的に認められる肝小葉中心付近の肝細胞壊死を反映したものと考えられた。

22. Tc-99m DTPA および I-131 OIH を用いた腎動態シンチグラフィによる移植腎急性拒絶の評価：臨床的拒絶との比較検討

宮崎知保子 広村 忠雄 木ノ内 滋
手戸 一郎 (市立札幌病院・中放)
平野 哲夫 (同・腎移植)

移植腎 27 症例に対して 258 回の Tc-99m DTPA および 242 回の I-131 OIH シンチグラフィ，198 回の single plasma sampling による ERPF 測定を施行した。その中で，17 回は核医学検査，臨床所見とも異常がみられ，臨床所見のみおよび核医学検査のみ異常が指摘されたのが各 1 回であった。核医学検査，臨床所見とも異常がみられた 17 症例の内訳は，急性拒絶 6，シクロスポリン急性中毒 6，両者の合併 3，尿管閉塞 1，急性尿細管壊死 1 例であった。臨床所見のみ異常が指摘されたのは急性拒絶の再燃症例であり，一過性に Tc-99m DTPA シンチ

グラムが閉塞パターンを示した症例では原因不明であった。

シクロスポリン急性中毒症例では，その %TRU，ERPF の低下は急性拒絶症例と比較して軽度であり回復もすみやかであった。また膀胱出現時間の遅延が見られたのは 6 例中 2 例のみで，血流低下を示した症例はなかった。

23. ^{99m}Tc -DMSA を用いた CDDP 腎障害の評価

西岡 健 入江 五朗 (北大・放)
伊藤 和夫 塚本江利子 古舘 正従
(同・核)

CDDP 投与患者 10 例 (のべ検査数 19 回) で ^{99m}Tc -DMSA (74 MBq (2 mCi)) 静注 2 時間後の腎集積率，尿中排泄率を測定した。CDDP 投与前後で腎集積率，また腎集積率と尿中排泄率の和は低下する傾向がみられた。また腎集積率/(腎集積率+尿中排泄率) (*) は CDDP 投与後の早期 (20 日以内)，後期 (20 日以降)，投与前 (control) でそれぞれ平均 0.67, 0.81, 0.85 と早期で低値を示した (20 日以内 <control: $p < 0.05$)。本薬剤の腎集積機序は糸球体濾過と近位尿細管での再吸収とされており，(*) は近位尿細管の再吸収機能を現している。 ^{99m}Tc -DMSA の腎集積と尿中排泄同時測定により尿細管障害の定量的な評価が可能と考える。

24. パーソナルコンピュータによる脳 SPECT 画像データの分散処理について

駒谷 昭夫 山口 昂一 虻 眞弘
叶内 哲 (山形大・放)
山岡 信行 (島津製作所)

リング型 SPECT (HEADTOME) による検査は，脳外科や精神科，神経内科等の複数の診療科にまたがり，それぞれ別個の疾患を扱い独自の画像処理を望むため，各科の研究者間でマシンタイムが混雑している。これに対処するため，画像ファイルを 3.5 または 5 インチのフロッピーディスクに転送し，画像の表示や処理，編集が各医局等のパソコン (MS-DOS) とマウスで行える一種の分散処理型 mini PACS (?) を開発した。画像処理の内容は，フィルタ処理，ROI 設定による rCBF の表示や面積測定，および等高線表示や距離測定などで，